



令和6年度
地域福祉拠点設立推進プロジェクト

事例集



広島県老人福祉施設連盟

目次

Contents

I. はじめに	2
II. 地域福祉拠点設立推進プロジェクトについて	3
III. 地域共生社会の実現に向けた取り組み 実践事例	
1. 令和6年度研究発表会 発表施設の取り組み	
〔養護〕 養護老人ホーム府中静和寮(福山ブロック)	4
〔特養〕 特別養護老人ホームフレアール楽生苑(尾道ブロック)	8
〔特養〕 特別養護老人ホームみよしの(三次ブロック)	13
2. 令和7年度研究発表会 発表施設の取り組み	
〔軽費〕 軽費老人ホーム コーポまとは(東広島ブロック)	17
〔特養〕 特別養護老人ホーム温養院(呉・海田ブロック)	21
〔養護〕 養護老人ホームさいきせせらぎ園(廿日市・可部ブロック)	25
IV. 令和6年度(2024)総括	29
V. 関係資料	
1. 令和6年度研究発表会 発表施設の抄録、スライド	
〔養護〕 養護老人ホーム府中静和寮	32
〔特養〕 特別養護老人ホームフレアール楽生苑	38
〔特養〕 特別養護老人ホームみよしの	47
2. 令和6年度地域福祉拠点設立推進プロジェクト会議 委員名簿	54

I. はじめに

社会福祉法人による「地域における公益的な取り組み」は、改正社会福祉法に基づき平成28年4月から法人の責務として位置づけられました。これをふまえ、高齢者をはじめ全ての人が地域、暮らし、生きがいを共に創り、高めあうことができる地域共生社会の実現を目指し、住民が主体的に地域課題を把握して解決を試みる地域づくりへの支援とともに、複合化・複雑化した課題を包括的に受け止める総合的な相談支援体制づくりが進められています。

これまで培ってきた福祉サービスに関する専門性やノウハウ、地域の関係者とのネットワーク等を活かしながら、「地域における公益的な取り組み」の実践を通じて、地域づくりと連携しつつ、積極的に貢献していくことが期待されています。

こうした背景をふまえ、広島県老人福祉施設連盟では、独自の重点事業として、2017（平成30）年度より『地域福祉拠点設立推進プロジェクト』を立ちあげ、「地域共生社会」の実現を目指した地域公益活動を推進するために継続して取り組んできました。プロジェクトにおいては、各実践施設や地域の状況をふまえて、相互に気づきを共有しながら取り組みを推進できるよう後押ししています。各施設・事業所における問題意識と地域の生活課題への対応をふまえた実践は、地域の福祉課題の解決・軽減につながるだけでなく、施設における人材育成や地域住民、関係機関等との連携の機会にもなっています。

具体的な活動例として、令和6年度は、移動が困難な地域の高齢者を対象とした買い物支援の取り組み、施設行事の開催や学校との連携による地域の関係者のネットワークづくり、居場所や既存の活動事業を通じた相談しやすい環境づくり等の地域での実践を本事例集で紹介しています。

今後も、地域共生社会の実現に向けた社会的要請に応え、地域住民から頼りにされ選ばれる施設・事業所になるために、連盟重点事業としての地域福祉拠点づくりは、その重要性が一層増すと考えます。そのため、我々も、本事例集をはじめこうした多様な取り組みを積極的に発信するとともに、社会福祉法人の存在意義をPRし、取り組みにおける地域での連携協働を全体で共有していく必要があります。

先述の実践をまとめた本事例集は、県内各地域での会員施設・事業所の取り組みを事例集として各年度紹介しているもので、今回で7冊を重ねることができました。地域における関係者の皆様には、社会福祉法人による地域の公益的な取り組みの実際をぜひ知っていただき、今後の一層の連携強化をお願いいたします。合わせて、連盟会員施設の皆様には、本事例集を活用して各地域における地域福祉拠点づくりの取り組みを進めていただき、「地域共生社会」の実現に向けた一助になれば幸いです。

2025年（令和7年）6月

広島県老人福祉施設連盟
会 長 中 川 勝 喜

Ⅱ. 地域福祉拠点設立推進プロジェクトについて

1. 経緯・経過

(1) 経緯

広島県老人福祉施設連盟では、平成 30 年度（2017 年度）より、各施設の地域共生社会実現に向けた取り組みがより効果的・効率的に進むよう「地域福祉拠点設立推進プロジェクト」として取り組んでいる。老人福祉施設が地域の福祉拠点になるための取組は、地域共生社会の実現に向けた社会的要請に応えるとともに、老人福祉施設が地域住民から選ばれる施設になるために重要だと考え、本プロジェクトを重点課題の一つとして継続して取り組んでいる。

(2) 経過

事業年度	事業主体	プロジェクトにおける取り組み
平成 29 年度 (2017)	自主	会員施設が地域共生社会の実現に向けた取り組みを推進できるよう「地域福祉拠点設立のための手引き」をまとめた。
平成 30 年度 (2018)	県委託	「地域福祉拠点設立推進プロジェクト」として、県内 6 ブロックの代表施設が取り組みをすすめ、その成果を事例集としてまとめた。
令和元年度 (2019)	自主	昨年度参加施設の継続した活動及び、新たな参加施設の取り組みがより効果的・効率的に進むよう「地域福祉拠点設立推進プロジェクト」として取り組み、その成果を事例集としてまとめた。
令和 2 年度 (2020)	自主	コロナ禍において、これまでのプロジェクト参加施設が、地域福祉拠点としての取り組みに受けた影響を検証し、コロナ禍でも、地域福祉拠点として取り組める工夫やその内容を事例集としてまとめた。
令和 3 年度 (2021)	自主	プロジェクト委員の選出について、ブロック毎から「軽費」「特養」「養護」「地域密着」など事業種別毎に変更した。また、取り組みを会員施設に広く周知するために、事例集の発行に加え、県研究発表会で 2 年間の取り組みを 3 施設毎に発表することとした。発表施設のうち 2 事例が中国地区老人福祉施設研修大会へ推薦された。
令和 4 年度 (2022)	自主	前年度と同様の取り組みを進めた。発表施設のうち 2 事例が中国地区老人福祉施設研修大会へ推薦された。
令和 5 年度 (2023)	自主	前年度と同様の取り組みを進めた。発表施設のうち 2 事例が中国地区老人福祉施設研修大会へ推薦され、うち 1 事例が全国老人福祉施設大会・研究会議へ推薦された。

2. 令和 6 年度 (2024) の取り組み

1. 取り組み

- (1) プロジェクト会議を年 4 回開催
- (2) 広島県老人福祉施設等研究発表会で 3 施設が実践報告
- (3) 令和 6 年度参加施設（6 施設）の全取り組みを事例集として発行。

Ⅲ. 地域共生社会の実現に向けた取り組み 実践事例

1. 令和6年度研究発表会 発表施設

途切れた地域との関係を再築する

〔福山ブロック〕 養護老人ホーム府中静和寮

1. 地域共生社会の実現に向けて、現状の課題

(地域の社会資源の1つである老人福祉施設として、できれば『共生社会』を念頭においた課題)

以前は地域の町内会・老人会・小学校・保育所などとの交流が図れていたが、コロナ禍を経て地域との交流がなくなり、関係性が疎遠になっている。入所している高齢者さんも外出の機会が減少し施設内から出ることがなく交流が減り意欲の低下もみられる。

2. 将来的にありたい姿、ビジョン

(本プロジェクトを通してどのような『共生社会』を目指すか。住民が共感できる言葉で書く)

介護施設に入所し閉じこもった生活を送るのではなく、介護施設の強みを生かして地域との関りを再構築していくことができる。

3. 2のビジョンに向けて、人と地域に起こしたい変化

(誰がどうなる。もしくは、誰が何をできるようになる状態を目指すのか。こんな状態をみたい!と思う3つ程度の"見たい未来"を簡潔に書く)

見たい未来像	
1	入所者さんが主体的に地域の方と関りが持てる
2	地域の方が介護施設へ関心をもってくれる
3	職員が施設・在宅の垣根なく係わる

4. 3の実現のために、今年度はまずどのような状態まで目指すか

(3を生み出すために、1年後に何がどうなっている状態を目指すのか。3の「起こしたい変化」ごとに、具体的な目標を書く(※評価しやすい目標設定))

具体的な目標	
1	入所者さんが主体的になりイベントを行うことができる
2	施設のイベントに来てもらい関りを作ることができる
3	意見交換など行いお互いの考えなど共有することで協働ができる

5. そのための事業内容

地域の方との関わりを持つため意見交換会のようなものを行いニーズの発見を行う

職員に対する地域貢献の必要性など周知

6. プロジェクト推進体制

事業所内で職員によるプロジェクトチーム結成

メンバー構成:養護施設主任相談員1名・養護施設管理栄養士1名・特養理学療法士1名・居宅ケアマネ3名

地域との連携 (民生委員児童委員 行政(包括支援センター含む) 社会福祉協議会)

7. 今年度内の行動計画及び実践記録

月	何をいつまで (取り組み内容と実施日)	誰が誰と (関わる人すべて)	何のために (目的)	実践経過	評価 (目的の達成度や今後の課題)
4月	事業所内プロジェクトチーム の発足	事業所職員	プロジェクト内容の検討や共有	養護施設の相談員と特養理学療法士と居宅介護支援事業所職員にて話しあい	在宅職員と施設職員とで話し合いを行うことで共通認識がもてた
5月	民生委員等、関連機関との意見交換など 施設へ地域民生委員を招いて意見交換会を開催 府中市社会福祉協議会へ訪問し地域の担当者と意見交換会	プロジェクトチーム 民生委員 社協	地域の想いの共有 プロジェクトの説明 協力依頼	民生委員さんと話し合いを行い地域の現状を聞き取った	地域の現状を知ることが出来、対応など考えることができた
7月	プロジェクトチームにて話しあい	事業所プロジェクトチーム	何を実施するか決定 地域と施設の交流について	地域にとって何が必要か検討し、集まる場所や組織をつくる事など検討し、以前行っていた	具体的な内容を検討でき、チーム内でも誰が何を準備するか骨組みが行えた

				「夢ふろしきの会」の復活を検討した ※夢ふろしきの会について 地域の髙リスク髙齢者を中心に居宅介護事業所府中静和寮が中心になり毎月1回施設へ自分で来てもらい、認知症予防や物作りを行いながら、参加者の実態把握を行っていた集まり	
8月	内容の検討会 毎月1回を目途に養護老人ホームにて検討会を実施。 集まりの名称を「静和寮サロン」に決定	事業所プロジェクトチーム	会の内容を具体的に決定するため	日程や内容について検討を行った。 11月に実施を予定し、認知症予防のため回想法や運動のプログラムを検討	具体的に日程が決まり内容を詰める事で準備を進める事が出来るようになった
9月	静和寮サロンの準備	事業所プロジェクトチーム	地域に向けての広報について	対象者を不特定多数ではなく、ハイリスク髙齢者として呼びかけ方法を検討し、居宅介護支援事業所で関わった調査でハイリスクとなった地域の髙齢者への参加を行う事とした	対象者を定めての開催に向けての準備ができた
11月	静和寮サロンの開催	事業所プロジェクトチーム 地域の髙齢者 6名 養護老人ホーム入所者 5名	認知症予防・フレイル予防を施設と地域で実施できる	自己紹介や静和寮サロンの内容や趣旨を説明 回想を取り入れた地域の70年～80年前の様子や生活の様子を話したり、ノルディックウォーキングを実施	参加者は笑顔で参加され、昔の様子など生き活きと話された。養護施設入所者も普段は施設内の人との交流がなかったが、会に参加され刺激を受けられた

8. プロジェクト会議の中で得たヒントや他施設の取り組み

職員が中心になって取り組むプロジェクトだけでなく、施設入所者が中心になって畑など行われている事業所の発表をきいて、受け身にならない地域との交流ができるのではないかと考えました。また地域の困りごとを解決するための組織化をされている法人の取組がある事を知り、自法人・自施設でも地域のニーズにフィットした支援ができるような方法を取り入れたいと思いました

9. 今年度の目標（４．今年度はまずどのような状態まで目指すか）に対する成果と課題

	具体的な目標	成果	課題とその解決策
1	プロジェクトの内容をまとめる。	プロジェクトチームにて実施内容を決定施設や在宅系職員に協力呼びかけを行えた。	施設職員が在宅高齢者さんとふれあう機会がなかったため不安がある。
2	実施チームで目的など共有し具体的な取り組みを決める。	在宅職員と施設職員とで地域の現状を把握して施設として行うことを決めることが出来た。	具体的な日程と役割について開催までに小まめな連携をとる。
3	入所さんと地域の方が参加のイベントを実施する。	静和寮サロンの実施が行えた。 在宅の高齢者さんと施設入所の高齢者さんの交流も行えた。	継続したサロンの実施のため参加者への呼びかけ。

10. ビジョンの具現化に向けて来年度から取り組みたいこと

2025年度の取り組み	事業所内での理念の共有　地域とのつながりの強化 入所さんと地域の人たちが交流するイベントの実施
中長期的取り組み	サロンの継続を行いながら参加者の増加を目指す 関係・協力機関を増やす 手伝ってもらえるボランティアを募る

11. プロジェクト（自施設の取り組み・プロジェクト会議）を通して、他の施設に伝えたいこと

プロジェクト委員	施設職員と在宅系職員とで地域の現状を把握して一緒に取り組みが行えた。お互いに仕事や考えを知る機会になったと思います。継続して係わることで地域における施設の役割を考え、協働する機会を作れると思います。また普段の業務でも連携しやすくなりました。
施設長	今回のプロジェクトを今期だけの取り組みにせず、継続した取り組みを行うことで地域と施設の関係を強めることが出来ると思うので、しんどいとは思いますが取りくみを続けれるよう頑張ってください。

地域の自治会と行政と社会福祉法人で 協働して地域力を高める活動

【尾三ブロック】 社会福祉法人新生福祉会

1. 地域共生社会の実現に向けて、現状の課題

(地域の社会資源の1つである老人福祉施設として、できれば『共生社会』を念頭においた課題)

瀬戸内海に浮かぶ生口島、高根島の2つの島からなる瀬戸田町は、令和6年4月時点で人口は7000人弱であり、高齢化率は46%となっている。人口減少・高齢化の上昇という地域課題がある。「新生福祉会（以下法人）」では平成27年より地域公益活動推進委員会を立ち上げ、法人の所有する宿舎を地域へ開放し、集いの場作りとして活動してきた。

令和2年9月に高根島にある「高根を住みやすくする会（以下自治会）」より、高齢者の買い物支援に協力してほしいという依頼があり、自治会、法人、「尾道市社協瀬戸田支所（社協）」の3つの組織で協働して令和2年10月より高根地区の買い物支援を開始する。

法人は送迎の車両と人員（ドライバー・公益活動推進委員）、自治会は地域の高齢者から対象者の選定と当日の買い物見守り、社協は保険や補助金等の情報提供や高根地区での取り組みを他の地域へ共有する等の情報発信を行い、それぞれの組織で役割分担を決め協働で取り組むこととした。この取り組みが徐々に地域に浸透していくことで、他の地域での買い物支援も実現していきたい。その際には高根地区で行っている活動をモデルケースとして活用できるように、現在の活動の経過や課題、問題も丁寧に対応していくよう意識している。

2. 将来的にありたい姿、ビジョン

(本プロジェクトを通してどのような『共生社会』を目指すか。住民が共感できる言葉で書く)

(地域の課題を地域住民が自分達で解決していくという意識が持てるように)

- ・地域住民が生活の中で感じている自分達の困り事を何とかしたいと思ったり、誰かの困り事を代弁したり話し合うことで、世代や分野を超えて皆で助け合い支え合う文化や風習のある地域を創成していきたい。
- ・課題はあるが自分達だけでの解決は難しいと思う時に、この地域に相談出来る場所があり協働してくれる人がいることを知っているのも、まず最初の1歩を踏み出そうと思えるような地域を作っていきたい。

(自法人の地域公益活動に関する将来像)

- ・各公益活動を始動するまでのプロセスやノウハウをエビデンスとして整理し、必要な支援をコーディネート出来る職員の育成。
- ・地域住民が地域の困り事の相談窓口として認知する。
- ・自法人の全職員が公益活動を理解し、相談を受ける・担当に繋ぐ・地域住民にフィードバックを行うことが出来るように伝え続け、各取り組みや活動内容の周知も定期的に行う。

3. 2のビジョンに向けて、人と地域に起こしたい変化

(誰がどうなる。もしくは、誰が何をできるようになる状態を目指すのか。こんな状態をみたい！と思う3つ程度の“見たい未来”を簡潔に書く)

見たい未来像	
1	地域住民自らが課題を解決しようとする意識を持ち、それを可能にする地域力を構築出来る。
2	島内の様々な課題解決に向けた社会資源が地域住民に周知・理解される。
3	我が地域で生まれた人々が皆で支え合い、これからも地域で暮らし続けていく。

4. 3の実現のために、今年度はまずどのような状態まで目指すか

(3を生み出すために、1年後に何がどうなっている状態を目指すのか。3の「起こしたい変化」ごとに、具体的な目標を書く(※評価しやすい目標設定))

具体的な目標	
1	地域力を高めることをコンセプトとして公益活動を継続して行く。
2	現在行っている公益活動を通して島内全体に周知・理解を深める。
3	新たな課題のアセスメントも並行して行い、課題が見つかる度に皆で話し合い、役割を決め、計画を立て、活動していくサイクルを確立する。

5. そのための事業内容

- ・現在行っている買い物支援のシステムやルールは確立しているので、今後も継続して行う。
- ・新たな買い物支援対象者の選定を定期的に行う。
- ・現在買い物支援を利用している対象者へ他の生活課題について聞き取りを行う。

6. プロジェクト推進体制

社会福祉法人 新生福祉会(地域公益活動推進委員会) :法人内各事業所から1名ずつ担当者を選出し組織している。

高根を住みやすくする会 :高根地区在住の区長、民生委員、地域住民で組織している。

尾道市社協瀬戸田支所

7. 今年度内の行動計画及び実践記録

月	何をいつまで (取り組み内容と実施日)	誰が誰と (関わる人すべて)	何のために (目的)	実践経過	評価 (目的の達成度や今後の課題)
R5 年 10 月	・コロナ禍においても月 1 回の買い物支援は継続していた。今後は、現在の買い物支援の内容（頻度・対象者・買い物場所等）の検討。 ・新しい地区での買い物支援の開始に向けての準備。 ・対象者の他の生活課題のアセスメント。	・新生福祉会の職員：車両の貸与と車両ドライバー ・社協職員：保険や補助金等制度の情報入手と他の地域への活動状況の周知 ・高根自治会：新規対象者の発掘や当日の移動見守り ※買い物支援利用登録者 6 名	・移動販売車の支援も今年から終了し、買い物難民が増加傾向にある。 ・人が集まる場所に寄ることで様々な刺激を得られる。これはデリバリーでは体験できない。実際に商品を目で見て手で触り財布から必要分の現金を支払う。買い物支援にて、通常出来ていない当たり前を提供する。	・ 3 つの組織が役割と責任を明確にし、協働して取り組めている。	・ 当初の課題解決は概ね行えており、この活動を継続していく。
R6 年 4 月	・新たな生活課題の抽出を、買い物支援利用者を中心に行った結果、ゴミ出しの課題が上がる。	※令和 6 年 4 月 買い物支援登録者数 10 名 ・ゴミ出しについても買い物支援と同様、3 つの組織で協働して行う。	・生活の質を向上させると共に、地域コミュニティの強化を図るため、ゴミ出し支援を通じて孤立防止を図る。	※ゴミ出しの課題について細かく聞き取りを行う。 ・毎日の生活から発生する家庭ゴミについては、ゴミ捨て場が遠い方もいるが自分達で行っている。 ・粗大ゴミ等長年捨てられずに自宅にあるゴミを何とかしたい。	・粗大ゴミを捨てるための支援を 3 つの組織で計画するためのテーブル会議を開催する。
R6 年 9 月	ゴミ出しの日程や流れ、ルールを会議で話し合いをする。 最初は買い物支援を利用している方のみ対象とする。 ゴミ出しリストの作成。 (お試し)	・高根自治会→担当の家に行きゴミの種類や量を確認する。リサイクル券が必要な家電品などは予め、担当の方が貰いに行く。	今まで家にある使わない家電や家具などを撤去することで、居住スペースが確保でき、QOL の向上に繋がる。		
9 月 22 日	話し合いで決まったゴミ出しが必要な方の家に行き、粗大ゴミを回収しごみ処理場へ持っていく。	新生福祉会→軽トラ 2 台使用して各家を回って粗大ゴミを回収。タンスなどは分解する。	今まで家にある使わない家電や家具などを撤去することで、居住スペースが確保でき、QOL の向上を繋がる。		粗大ゴミの撤去が出来て満足そうな様子が見られる。一方で予定していた粗大ごみの量より追加が増えたりして時間に余裕が

R7年 4月	ゴミ出し支援（買い物支援の対象者） 粗大ゴミの量の確認・事前に解体が必要な物があるか把握する。	新生福祉会→軽トラ2台使用して各家を回って粗大ゴミを回収したのち利用者同伴でゴミ処理場まで行き粗大ゴミを捨てる。			なかった。事前にゴミの確認や回収して解体が出来るものは解体する。
-----------	--	--	--	--	----------------------------------

8. プロジェクト会議の中で得たヒントや他施設の取り組み

- ・取り組みを実施の前後で比較し、評価することが必要。
- ・自法人で実施している複数の公益活動の中から一つに絞り発表すること。

9. 今年度の目標（4. 今年度はまずどのような状態まで目指すか）に対する成果と課題

	具体的な目標	成果	課題とその解決策
1 ・ 2	・高根地区（現在行っている地区）以外の地区から買い物支援開始に向けて声が上がリ、組織作りを始める。	・月1回の会議（第2木曜日）と月1回の開催（第2日曜日）の活動を継続中。現在登録者は10名。	・他の地区から買い物支援の声が上がらないことも課題と感じている。 ※ニーズは全地域あり ・買い物支援を行う為の組織作りや活動するまでのプロセス等は高根地区というモデルケースがあるので他の地域へも活用したい。
3	・新たな課題発掘と課題解決に向けての活動	・買い物支援を利用されている方を主として、その他日常生活の困りごとを聞く機会を設け、情報を整理する。 ・ゴミ出し（粗大ゴミ）について、廃棄も自分では出来ないし、部屋にあることで邪魔にもなっていると意見が多く上がった。	・これから3つの組織で月1回開催される会議の場にて、ゴミ出し支援を行うにあたり計画を作成する必要がある。

10. ビジョンの具現化に向けて来年度から取り組みたいこと

2025年度の取り組み	・現在の買い物支援の取り組みの継続。 ・新たな生活課題である「ゴミ出し」について、本格的に実施できるよう会議等で準備打合せしていく。 ・他の地域への買い物支援の取り組み普及。 ・SCや行政との連携、民間の活用を検討していく。
中長期的取り組み	基本的には「地域力を高める支援」なので、地域住民の自発的な課題解決意識が望まれますが、買い物について生活課題と感じている方が多く存在する事実を踏まえ、各地域へアウトリーチをかけることも検討していく必要がある。

11. プロジェクト（自施設の取り組み・プロジェクト会議）を通して、他の施設に伝えたいこと

プロジェクト委員	自法人では地域公益活動について、平成 27 年より組織的に活動しております。拠点づくり、買い物支援、子ども食堂等様々行う中で、今回は買い物支援と現在進行形の新たな生活課題に焦点を当てました。
施設長	私たち新生福祉会では、島しょ部において住民と行政と協働しながら公益活動を進めていきました。 買い物支援では自治会・社協と役割分担し、そこから見えた「ゴミ出し問題」にも取り組んでいます。重要なのは地域の声を聞き、各組織の強みを活かした協働体制の構築です。施設の枠を超え地域の一員として住民と共に課題解決へ向かう姿勢が共生社会の実現につながると考えます。

地域との繋がり復活と深めていくために ～施設の中から地域へ～

【三次ブロック】 特別養護老人ホームみよしの

1. 地域共生社会の実現に向けて、現状の課題

(地域の社会資源の1つである老人福祉施設として、できれば『共生社会』を念頭においた課題)

- ・1959年開設と古くから地域に馴染みある法人であるが、近年は新型コロナウイルスの感染症等の影響もあり、地域との交流に関する活動が減っていて、施設の様子や魅力を発信する機会も限られている。
- ・コロナ禍を経て施設や職員は外部との交流に抵抗を感じてしまっている。入所者を守りながらも、施設や入所されている皆様と地域や地域住民とが繋がりを感じられ、互いのためになる活動には何ができるのか検討していきたい。

2. 将来的にありたい姿、ビジョン

(本プロジェクトを通してどのような『共生社会』を目指すか。住民が共感できる言葉で書く)

- ・安心して頼れ、任せられる身近に感じられる施設、老いても安心して暮らせる地域。

3. 2のビジョンに向けて、人と地域に起こしたい変化

(誰がどうなる。もしくは、誰が何をできるようになる状態を目指すのか。こんな状態をみたい!と思う3つ程度の”見たい未来”を簡潔に書く)

見たい未来像	
1	施設職員、入所者と地域住民(子供～高齢者まで)が認知しあえ、触れ合える関係。
2	地域住民が困った時に相談しやすく身近に感じられる施設になる。
3	

4. 3の実現のために、今年度はまずどのような状態まで目指すか

(3を生み出すために、1年後に何がどうなっている状態を目指すのか。3の「起こしたい変化」ごとに、具体的な目標を書く(※評価しやすい目標設定))

具体的な目標	
1	地域の清掃活動へ職員・入所者と参加ができる。
2	地域住民に施設を知ってもらえる活動や行事を実施できる。
3	地域の課題について共に考え、法人として出来ることに柔軟に取り組むことができる。

5. そのための事業内容

- ・地域行事や清掃活動について自治会との情報共有。地域にある関係機関との連携
- ・認知症カフェへ継続的に参加
- ・運営推進会議の継続開催
- ・施設見学会開催、知るきっかけ作り

6. プロジェクト推進体制

施設長、特養相談員、特養介護主任、介護職員、在宅介護支援センター所長、デイ所長、養護主任

民生委員

地区常会長（※常会=コミュニティ組織、「自治会」の別称）

7. 今年度内の行動計画及び実践記録

月	何をいつまで (取り組み内容と実施日)	誰が誰と (関わる人すべて)	何のために (目的)	実践経過	評価 (目的の達成度や今後の課題)
R6 5月	運営推進会議	地域代表、家族代表、行政職員、 包括職員、特養施設長、特養相 談員、特養介護主任、副主任、	施設事業内容紹介、継続的な交 流、第3者評価	施設の様子について、写真を用 いて報告した。	施設内の活動や地域へ目を向け た取り組みをしようとしている ことを知ってもらえた。地域と しても一緒に行事等協力しても らう事となった。
7月	小学生施設見学	施設事務員、施設長、介護主任	施設を知ってもらう	地域散策の授業であったが、急遽 施設を見てもらうこととなった。	職員に地域貢献の意識が芽生 え、あいさつや声をかけること が出来た。計画的に実施でき ると良いと感じた。
7月	花火を見る会	特養介護職員、地域住民	地域住民と施設利用者、職員の 関係作り	チラシを作成し、周辺の家配布 した。雨天のため中止となった。	住民とあいさつ等はでき、後日住 民の方から、「残念だったね」等 話になり、何かをしようとして いる事を知ってもらえた。職員も行 動し、実感が少し芽生えた。
8月	地域の清掃活動	地域住民 特養介護職員	地域住民との顔合わせが継続的 にできる	雨天のため中止、地域住民との 顔合わせと挨拶はできた。	開催されないと貢献や交流に繋 がらない。
8月	夕涼み会開催	地域住民、地区常会長、子供会、 介護職員、各部署職員	地域住民と施設利用者や職員との 交流、施設を知ってもらうこと	法人内の職員の協力を得て、か き氷・うちわ作り・介護食体験 を実施。地域の方も100名ほ ど、入所者10名ほど参加	久しぶりの地域行事、また外で の行事で、職員入所者も楽しみ 良い交流となった。「また来年 も」との地域の声有り継続的に 行いたい。自治会加入者以外の

9月	施設の認知度について調査	認知症カフェ参加者、民生委員、介護職員	施設への関心や求められている事を知る	アンケート調査実施、23名から回答ある。	参加もあり、知り合うきっかけとなった。 まだ元気だから考えていない。デイサービスってどんなことをしているのか知りたい。いずれ通る道だから知りたい等の意見が有り。知るきっかけ作りが必要と感じた。
11月	地域清掃活動	地域住民、介護職員	地域住民との顔合わせが継続的にできる	協力しながら溝の泥上げ等を行った。	公園の花壇をしていた方が出来なくなり、荒れているとの話ある。次の取り組みに活かしていく。
R7 1月	とんど焼き	地域住民、入所者、介護職員	地域交流	準備から参加し話をする事が出来た。見学には入所者7名参加	入所者と地域の方が話することで互いの刺激になっていた。
毎月	認知症カフェ（民生委員主催）	地域住民、民生委員、介護職員	地域住民との交流	参加者人数は15～23名程度体操やミニ講座を実施	施設を知ってもらうこと、職員のスキルアップにも繋がっている。継続していく。

8. プロジェクト会議の中で得たヒントや他施設の取り組み

- ・新たな取り組みを行うだけでなく、現在行っている事を振り返る事も大切であり、無理のない取り組みを行っていく必要がある。
- ・地域のニーズに合わせ取り組みを行う事が大切。施設側のしたいことだけでなく、地域課題を聞き出し、地域に求められている事を考察し取り組む。
- ・情報発信することで、地域貢献について、職員一人ひとりに当事者意識を持ってもらう。

9. 今年度の目標（４．今年度はまずどのような状態まで目指すか）に対する成果と課題

	具体的な目標	成果	課題とその解決策
1	地域の清掃活動へ参加	介護職員が参加し、久しぶりに顔合わせができ、地域の方との話の中から困り事を聞く機会がもてた。職員も地域との繋がりを感じ、何かをしたいという気持ちをもつきっかけとなった。	頻度が年に２回程度のため、貢献や交流に繋がりにくい。施設に隣接している公園の清掃活動を職員は出来たが、入所者には負担があり、屋外散歩のついでに職員と一緒にゴミを拾う等となった。
2	地域住民に施設を知ってもらえる活動を実施	運営推進会議の再開、認知症カフェへ参加、小学生の訪問受け入れ、とんど焼き参加を行うことが出来、「困ったときは頼むで」と話があり、施設の認知に繋がった。職員も活動から自分たちの役割に意識や自信を持てた。	関りが持てた住民の方には知ってもらえたが、多くの方に知ってもらうには至っていない。今後も活動を継続していく事と、世代間交流や小学校へ介護や福祉について触れる機会をもってもらえるように連携体制を作っていく。
3	地域の課題について共に考え、法人として出来ることに柔軟に取り組むことができる。	夕涼み会を地域の方と開催できた。自治会加入者以外の方とも交流が持て、地域一帯で顔見知りとなるきっかけができた。法人の上長たちの参加により、法人全体の地域へ目を向けていくきっかけになった。	地域住民同士の関係性が希薄な面が見られている。今後も施設と地域と連携し、継続的に取り組んでいく。地域課題の把握に努め、今後も法人として事業につなげていく。

10. ビジョンの具現化に向けて来年度から取り組みたいこと

2025年度の取り組み	地域住民と施設入所者と職員ともに地域の美化活動を継続する。運営推進会議、認知症カフェへの参加の継続、地域行事への参加、施設見学会開催、地域の子ども食堂との関りを持っていく。施設内の地域活動委員会の活動を活発化する。
中長期的取り組み	地域のニーズと活動が一致できるように、運営推進会議やその他の方法で情報を得ていく。既存の取り組みの継続と新たな取り組みをしていき、地域と施設がつながり協力し合える関係を構築していく。

11. プロジェクト（自施設の取り組み・プロジェクト会議）を通して、他の施設に伝えたいこと

プロジェクト委員	新型コロナウイルス感染症の影響もあり施設と地域の関係性が希薄になっていますが、施設から一歩出て地域活動をすることで繋がりを感じます。施設が地域に貢献することは、お互いを知ることができ、相互に良い効果が見られ、より地域に根ざした施設運営に繋がっているのだと思います。
施設長	地域活動に目を向けることの大切さと同時に、現在入所されている方々も含め検討していきたい。 施設としては、知ってもらう、利用してもらう、頼りにしてもらう、協力してもらうを段階的に進めていく。

地域共生社会実現に向け、 コーポまとはができること

【東広島ブロック】 軽費老人ホーム（A型）コーポまとは

1. 地域共生社会の実現に向けて、現状の課題

（地域の社会資源の1つである老人福祉施設として、できれば『共生社会』を念頭においた課題）

人口減少や高齢化が進み、地域行事やサロン等の参加人数が減ってきている。
施設入所後も自宅同様、可能な限り自分の生きがい・やりがい活動を続けたいとの希望がある。
軽費老人ホームという自立の方でも入所可能な施設の認知度が低い。

2. 将来的にありたい姿、ビジョン

（本プロジェクトを通してどのような『共生社会』を目指すか。住民が共感できる言葉で書く）

ご利用者も生きがい・やりがいを持って、地域の一員として活躍し続けることができる。

3. 2のビジョンに向けて、人と地域に起こしたい変化

（誰がどうなる。もしくは、誰が何をできるようになる状態を目指すのか。こんな状態をみたい！と思う3つ程度の“見たい未来”を簡潔に書く）

見たい未来像	
1	自立の方でも入所できる軽費老人ホームが広く知られ、地域社会の福祉に貢献する。
2	ご利用者は施設に入所していても、地域の活動に積極的に参加し、生きがいを持って生活される。
3	受け手・支え手双方向の関係になることで、地域の中で居場所を感じていただく。

4. 3の実現のために、今年度はまずどのような状態まで目指すか

（3を生み出すために、1年後に何がどうなっている状態を目指すのか。3の「起こしたい変化」ごとに、具体的な目標を書く（※評価しやすい目標設定））

具体的な目標	
1	クラブ活動の再開（コロナ禍で一部中止していた）や活性化を行う。
2	施設の外において、地域とつながる行事参加・販売活動を行い認知度を上げていく。
3	同法人のカフェと連携し、地域とつながる企画を計画していく。

5. そのための事業内容

- ・地域の環境整備活動（清掃・花植え・駅前美化活動）への参加
- ・道の駅やマルシェでの販売活動
- ・市内行事における展示、販売ブースの出店
- ・小学校との交流活動（出前授業・交流行事開催）
- ・地域の方と共同で実施するクラブ活動の企画・開催

6. プロジェクト推進体制

施設長、業務部長、ケアマネージャー、生活相談員、ケアワーカー 同法人のカフェスタッフ 地域の小学校 道の駅、海の駅、マルシェ
外部ボランティア（クラブ活動講師）

7. 今年度内の行動計画及び実践記録

月	何をいつまで （取り組み内容と実施日）	誰が誰と （関わる人すべて）	何のために （目的）	実践経過	評価 （目的の達成度や今後の課題）
R6	休止していた書道クラブの再開を検討。外部ボランティアの参加許可を得た。	ご利用者、施設長、生活相談員、ケアワーカーボランティア	クラブ活動の再開	書道クラブ参加者を募りクラブ活動再開。地域の高校生が外部ボランティアの講師。	計画通り、クラブ活動を徐々に再開し、地域ともつながり始めている。
	（年間）道の駅での野菜販売	ご利用者、道の駅の方々、生活相談員、ケアワーカー	園芸クラブ 生きがい・やりがい活動	野菜栽培を販売によって生きがい・やりがいの実感へ。	
	駅前商店街の美化作業に園芸クラブのメンバーが参加	ご利用者 駅前商店街の方々 生活相談員、ケアワーカー	地域貢献 軽費老人ホームの宣伝 クラブの施設外活動	地域の方々と一緒に活動し、花壇の作業が得意な皆さまは自信を得た様子。	
7月	小学生来園・交流会の開催	ご利用者、生活相談員	交流行事	年間計画の初回行事。ご利用者	小学校とは年間計画で交流行事

		小学生、小学校教諭	小学生の高齢者理解 多世代交流	と小学生の初顔合わせ。小学生 に高齢者施設を知っていただく。	を計画。毎学期ごとに交流。
9月	バリアフリー演劇併設バザー販 売作品作り、出店	ご利用者、ケアワーカー 生活相談員	生きがい・やりがい活動 地域貢献 軽費老人ホームの宣伝	地域の一般の方々に園芸クラ ブ・手芸クラブの活動を知って いただいた。野菜完売。	地域の一般の方と直接接する機 会となり、施設の周知につな がった。
11月	小学校での出前授業	地域ボランティアの方々 ご利用者、生活相談員	交流行事 小学生の高齢者理解		
	大王地区サロンの方々と合同で 佛通寺紅葉ドライブ実施	ご利用者、業務部長、 ケアワーカー、生活相談員 ケアマネージャー	軽費老人ホームの宣伝 地域貢献・交流活動	サロンの高齢化により遠方への 外出機会減少の相談があり、施 設行事と抱き合わせにて外出行 事を実施した。	地域のニーズに応えた初めての ケース。ニーズの把握と対応方 法を勉強していく。
1月～	R7年度の新しい行事計画につ いて施設内での協議	施設長、業務部長、 生活相談員、ケアワーカー	具体的な地域公益活動の検討 と、R7年度の取組みの方向性 を相談	クラブ活動の地域展開と同時に 地域ニーズの把握に力を入れて いくこととなる。	

8. プロジェクト会議の中で得たヒントや他施設の取り組み

公的機関を巻き込んだ大きなプロジェクトのみではなく、社会資源として施設を認知していただくことも一つの地域貢献になると感じ、施設の活動を外に広げていく方法を検討しました。

施設内の活動を施設外に広げるとともに、地域のニーズを把握して社会福祉法人の役割（地域公益活動）を実行することも重要であるとアドバイスをいただきました。

9. 今年度の目標（４．今年度はまずどのような状態まで目指すか）に対する成果と課題

	具体的な目標	成果	課題とその解決策
1	コロナ禍で中止しているクラブも、可能な限り活動を再開できるように感染対策、地域交流貢献、ボランティアの方々とバランスよく調整していく。	書道クラブ・手芸クラブが今年度より活動再開できた。	クラブ活動への参加は全ご利用者の 1/3 程度。他の方も参加しやすい（興味のある）活動を企画していく。
2	今年度、小学校と初めて年間を通しての交流計画を立てて交流している。相互関係を恒例行事としていけるような体制づくりを行う。	総合学習として 50 時間を『高齢者（施設）の理解』にあてていただけている。	来年度も継続できるかどうか、今年度後半に双方反省・改善を行っていく。
3	ご利用者が直接出展・販売ブースに立てるような取組みを企画・実施し、参加意欲の向上、生きがい・やりがいの実感につなげることで、参加人数を増やす。	バザーでご利用者が直接販売をしたことで、売れるということに喜びとやりがいを実感していただいた。	ご利用者が地域参加する活動が地域のニーズとマッチするようにしていきたい。

10. ビジョンの具現化に向けて来年度から取り組みたいこと

2025年度の取り組み	地域ニーズの把握のため、地域活動（花植え・サロン等）に参加して馴染みの関係を作っていく。 地域の一般の方も共同参加したクラブ活動（作品の共同製作、ご利用者を講師としたワークショップなど）の開催。 把握した地域ニーズに対してコーポまとはができること（公益的活動）を実践する。
中長期的取り組み	地域の方と馴染みの関係となり、地域の困りごとの相談窓口となれる施設を目指していく。

11. プロジェクト（自施設の取り組み・プロジェクト会議）を通して、他の施設に伝えたいこと

プロジェクト委員	軽費老人ホームは“ご利用者が地域に出ていきやすい”というメリットがあり、地域共生社会実現に向けてこのご利用者の方々の地域参加が必要不可欠となります。軽費老人ホームという【地域】に属するご利用者の地域参加の支援と、コーポまとは所在地である竹原市の地域ニーズへの対応を結び付けた活動として、ご利用者参加型の活動を検討していきます。
施設長	社会福祉法人として、地域の中での存在感を出していくことがますます必要・重要となる中で、このプロジェクトの事例が広島県老人福祉施設連盟の会員の手助けになれば良いと思います。 また、各施設・事例の取組みが地域での生き残りにもつながると思います。

地域との繋がりを再構築する為、施設主体ではなく地域ニーズ、地域住民の視点から必要とされる活動をいかに実施できるか。

【呉・海田ブロック】 特別養護老人ホーム温養院

1. 地域共生社会の実現に向けて、現状の課題

(地域の社会資源の1つである老人福祉施設として、できれば『共生社会』を念頭においた課題)

50年以上にわたり地域に根差した施設を目指してきました。感染症の拡大の影響で地域との関わりが一旦遮断され、今後交流・地域貢献を再開・拡大していく方法としてどういったものがあるかを見直す必要がありました。既存の交流行事を活用しながら、幅広い世代、地域の方に改めて施設を知ってもらい、気軽に活用してもらえようような関係性を築いていく必要があります。

2. 将来的にありたい姿、ビジョン

(本プロジェクトを通してどのような『共生社会』を目指すか。住民が共感できる言葉で書く)

様々な世代に施設を知ってもらい、働く場としての施設、将来利用しても良いと思っていただける施設を目指したい。

3. 2のビジョンに向けて、人と地域に起こしたい変化

(誰がどうなる。もしくは、誰が何をできるようになる状態を目指すのか。こんな状態をみたい!と思う3つ程度の”見たい未来”を簡潔に書く)

見たい未来像	
1	子どもたちには施設を知ってもらい、どんな事をしている場所なのか、将来働く場の選択肢の一つとして認知してもらいたい。
2	現役世代には介護で困った時にいつでも相談していただける施設となる。
3	高齢世代には介護予防などの知識、運動を紹介・提供する事で、健康寿命をのばしてもらいながら、介護サービスが必要な時には利用しやすい関係性を築く。

4. 3の実現のために、今年度はまずどのような状態まで目指すか

(3を生み出すために、1年後に何がどうなっている状態を目指すのか。3の「起こしたい変化」ごとに、具体的な目標を書く(※評価しやすい目標設定))

具体的な目標	
1	小学生から高校生まで施設で行う行事等の受け入れにより温養院がどんな事をしているのか、どんな施設なのかを知ってもらう。
2	職員が地域行事に定期的に参加・協力する事で顔なじみの関係になる。
3	地域サロンへの講師派遣により介護予防体操、介護相談の受付、福祉用具等の体験会を実施。

5. そのための事業内容

- ①施設内行事に子どもから大人まで地域住民への参加呼びかけ ②子ども陶芸教室 ③自治会主催の盆踊りに参加。 ④地域の高齢者サロンへの参加。
⑤介護教室の開催 ⑥手づくりパン喫茶（仮）

6. プロジェクト推進体制

- ・施設内地域プロジェクト委員会（施設長、生活相談員、看護師、施設介護員、通所介護事業所、居宅ケアマネ 管理栄養士）
・陶芸ボランティア ・自治会 ・ふれあいサロン関係者 ・学校関係者 ・福祉用具事業所

7. 今年度内の行動計画及び実践記録

月	何をいつまで （取り組み内容と実施日）	誰が誰と （関わる人すべて）	何のために （目的）	実践経過	評価 （目的の達成度や今後の課題）
4月 5月	介護教室	プロジェクト委員、福祉用具事業者、サロン参加者、飲食関係の事業者	地域住民の福祉用具等に関する疑問に対し介護教室を実施。飲食関係事業者とも連携を図り栄養面での教室開催も検討。	サロン参加者の介護に関する困り事を前年度までのアンケートで確認。今年度4月、5月で実施。	困りごとへの助言、対応により各関係機関や自施設での支援を実施。教室の内容を変更し2回目を開催。開催する地域を拡大していく事も検討。
6月 ～ 毎月	地域の老人会が主催するサロンへの講師派遣	サロン参加者、施設職員	地域住民の介護予防、関係構築。	毎月月末頃に自治会館にて体操を実施。	意欲的な方が多く、参加者は常に40人以上。
7月 ～ 8月	子ども陶芸教室	施設職員、陶芸ボランティア、地域住民参加者、職員の子ども	地域住民や子ども世代に施設を知ってもらう。 作品を作る過程において参加者と職員が顔なじみになるなど関係づくり。	子どもと親御さんの参加により施設を幅広い世代の方に知ってもらう事が出来た。子どもの夏休みの宿題にもなった。	陶芸ボランティアさんには窯などの施設を提供。コロナ禍を除いて30年以上教室を実施。小学校低学年から高校生まで幅広く参加を呼びかけ陶芸体験を提供。

8月	自治会主催の盆踊り大会に参加、協力	自治会、自治会に所属している施設職員、施設長、栄養士、看護師他	地域住民との交流。賑わいづくり。	コロナ禍を機に施設主催から自治会主催の盆踊りに参加協力する形へと変更。	自治会からは施設主催での盆踊りを望まれた。再開するめどが立たず自治会が先行して盆踊りを実施。参加協力する事で地域を盛り上げる機会とする。
不定期 (年2回)	手づくりパン喫茶（仮）	プロジェクト委員、施設調理員、サロン参加者	パンづくりが得意な調理員が在籍しており、施設内でも評判。そのパンをサロンで振る舞う事で地域住民との交流、賑わいづくり。	利用者や職員からの評判が良くサロンでの交流機会を活用して喫茶として展開。	

8. プロジェクト会議の中で得たヒントや他施設の取り組み

地域住民のニーズ・要望を吸い上げながら法人、施設として何が出来るか、対応していく体制、組織づくり。

地域の特性を把握し地域に根付いた顔の見える関係性の構築。

飲食関係の事業者と企画・連携しサロンなどで交流を図る事も検討してはどうか。

評判が広がりすぎて対応困難になる可能性もあったと助言を受け、地域を限定して実施していく。

9. 今年度の目標（4. 今年度はまずどのような状態まで目指すか）に対する成果と課題

	具体的な目標	成果	課題とその解決策
1	介護教室の開催。テーマはニーズを聞き取りながら適宜変更。サロンへの体操講師派遣の継続	高齢者の介護予防と家族等への相談窓口として認知してもらう。	実施する地域が限定されている。他地域へ広げるため施設に所属している職員が居住する地域の自治会へ展開していく。
2	施設職員による手づくりパン喫茶の開催	年2回程度を目標に実施。幅広い年齢層に施設をアピール。	実施する地域が限定されている。他地域へ広げるため施設に所属している職員が居住する地域の自治会へ展開していく。
3	子ども陶芸教室の開催	子どもさんの年齢層を幅広く受け入れたい。今後も継続した行事にしていきたい。	陶芸ボランティアの高齢化。受け入れ人数の制限。新たなボランティアの受け入れや職員が指導できるようにする。

10. ビジョンの具現化に向けて来年度から取り組みたいこと

2025年度の取り組み	地域のサロンを通して介護教室を開催。今回は福祉用具事業者と協力し福祉用具、住宅改修などをテーマとする。今後サロン参加者からニーズを聞き取りながら新たな企画を考えていきたい。サロンの実施地域を自治会関係者、民生委員などと連携しながら可能な範囲に拡大していく。施設内で作ったパンをサロンなどで無料提供し交流を図りながら、地域ニーズをくみ取るため手づくりパン喫茶（仮）を開催。
中長期的取り組み	近隣自治会での活動だけでなく、内容を見直ししながら範囲を広げて展開していきたい。 交流の場として参加者が気軽に立ち寄れる環境、集いの場所とし、地域の学校や子育て世代とも連携することで、より多様な層の人々が参加できる場、機会を構築していく。

11. プロジェクト（自施設の取り組み・プロジェクト会議）を通して、他の施設に伝えたいこと

プロジェクト委員	施設や職員個人の強みを生かした活動を展開していく事で、魅力ある施設へと評価してもらえるのではないかな。
施設長	感染症拡大により閉鎖的になりつつあった地域との関係性を再生するために施設として今何ができるかを試行錯誤し、施設と地域との距離感を近づける要素を増やしていきたいと思います。

「食」で地域と結ぶ新たな関係づくり

〔廿日市・可部〕 養護老人ホームさいきせせらぎ園

1. 地域共生社会の実現に向けて、現状の課題

(地域の社会資源の1つである老人福祉施設として、できれば『共生社会』を念頭においた課題)

中山間地域で人口減少、高齢化が顕著なため地域力が低下

- 1 食生活志向性の高い入所者ほど地域志向性が高い傾向があるという施設内の先行研究の結果をもとに、入所者の志向性に添った支援である「食」と「地域」を結ぶ活動を検討していきたい。
- 2 佐伯地域は、廿日市市内の中でも、人口減少や高齢化（高齢化率39%／廿日市市全体は30%）が顕著になっている。地域の集落はより小規模化も進んでいる。廿日市市全体でも若年女性減少率50%を超え、消滅可能性都市の中に含まれている。こうした地域力が低下しつつある中であって「食文化」「地場産物」「特産物」についても、次の世代につなげるために、郷土料理や行事食について学べる機会を増やすことが、課題となっている。
- 3 高齢者の在宅生活の継続に必要な支援については、日々の暮らしを支える「生活支援に関するニーズ」に対応できる社会資源の充実が求められている。そのため高齢者施設として、「高齢者の食」の分野で地域と協同して地場産物、特産物を利用した料理の利用、提供、伝達、食育の推進が課題となっている。

2. 将来的にありたい姿、ビジョン

(本プロジェクトを通してどのような『共生社会』を目指すか。住民が共感できる言葉で書く)

地域の高齢者における食事と栄養の交流拠点

3. 2のビジョンに向けて、人と地域に起こしたい変化

(誰がどうなる。もしくは、誰が何をできるようになる状態を目指すのか。こんな状態をみたい！と思う3つ程度の“見たい未来”を簡潔に書く)

見たい未来像	
1	地域の食材、農産物を活用した地域住民との関係づくり
2	伝統的郷土料理の継承と地域住民のより健康な心身へ貢献
3	高齢者の食育を地域へ発信する

4. 3の実現のために、今年度はまずどのような状態まで目指すか

(3を生み出すために、1年後に何がどうなっている状態を目指すのか。3の「起こしたい変化」ごとに、具体的な目標を書く(※評価しやすい目標設定))

具体的な目標	
1	地元農家、地元食材の活用をとおして、「食」で地域との関係の基礎を築く
2	地域の食材、農産物を活用した郷土料理を地元食堂と協同提供
3	当施設で提供する高齢者向け食事、メニューの紹介による宣伝広報活動の準備

5. そのための事業内容

- ・地元農家、JA の指導で本格的な「佐伯おお長ナス」栽培を行う
- ・地域行事等に参加し、高齢者向けの食事を地域に紹介する
- ・地元食堂とコラボレーションした「郷土料理」の定食メニューを開発、提供

6. プロジェクト推進体制

施設内地域プロジェクト委員会（施設長、養護課職員、栄養調理係職員、総務課職員）
 地元農家、地元食堂

7. 今年度内の行動計画及び実践記録

月	何をいつまで （取り組み内容と実施日）	誰が誰と （関わる人すべて）	何のために （目的）	実践経過	評価 （目的の達成度や今後の課題）
4月 ～ 10月	地域の特産物「佐伯おお長ナス」 の栽培	入所者（養護、ケアハウス）、 養護職員、栄養調理職員	入所者が地元食材を知り、施設 職員、入所者が地元農家さんと 関係を築く。 養護入所者と一緒に作物収穫の 喜びを楽しんでいただく。	プロ農家の指導を受け栽培した ことで JA、日本農業新聞の取 材を受ける。 収穫した 700 本は食材に使用、 地域の産直市で販売等に活用す る。次年度にも、入所者と職員 で栽培に取り組めるよう、栽培 方法のマニュアルを作成する。 	入所者は、過去の農業体験を思 いだし、育てる楽しみ、やり がいにつながった。地元農家、 JA とつながりを持てた。

7月、 8月 以降 偶数月	カレーの日 園内栽培の食材利用：なす・じゃが芋 ナスとサツマイモのマフィンの提供	養護入所者、養護職員、栄養調理職員	地元食材を知り、地元農家さん と関わりを持つ	収穫が始まる7月をカレーの日に 設定し、事業所の昼食に揚げなす のトッピング、なすの漬物を提供 する。地元農家のレシピをアレン ジしてマフィンを提供する。	イベント感あふれるカレー会等 において入所者自ら栽培したな すを食べ、食べる楽しみと育て る楽しみを実感していただいた。
10月	やわらか餅の販売、地域の特産 物なす栽培の取組発表	地域住民、養護入所者、養護職員、 栄養調理職員	当園で収穫したなすを使った 「なすみそ」を添えた高齢者向 け食事の一例「やわらか餅」を 紹介する。地元特産物なす栽培 の取り組みを地域イベントに参 加した地域住民の方にプレゼン する。	高齢者向け嚥下調整食（やわらか餅） を地域住民に販売し紹介する。高齢 者施設でのなす栽培を紹介する。	日頃食べることのない嚥下調整 食（170食）を多くの年代の 方に紹介することができた。
12月 ～ 3月	「せせらぎ定食」「せせらぎセッ ト」を地元食堂で地域の郷土料 理の提供	地元食堂、養護職員、栄養調理職員	当施設と地元食堂と連携し、郷 土料理の提供を行い、地域の高 齢者を含む住民、観光客等広く 伝えたい。	地元食堂とのコラボ企画を行い、 郷土料理の継承を行う。 さいき汁の考案者からレシピの由 来を聞き取り料理に反映する。	地域外の方の利用を多くいただ く。郷土料理の伝承の必要性も 感じていただいた。



8. プロジェクト会議の中で得たヒントや他施設の取り組み

入所者や施設側の声、視点だけでなく、地域の困りごと、地域課題から私たちに何ができるかを考えていく必要がある。

地域に参加することはあくまでも「入口」である。そして、イベント、取り組みはあくまでも「手段」である。それを実行してその先にある「目的」「意図」を明確にして進めていきたい。

9. 今年度の目標（4. 今年度はまずどのような状態まで目指すか）に対する成果と課題

	具体的な目標	成果	課題とその解決策
1	地元農家の指導、協力を受け、地域の特産物「佐伯おお長ナス」の栽培、収穫、利用により地域の特産物を知る。	700本の収穫があり、地域の特産物について学んだ。収穫物は入所者の食事に活用した。また地域の産直市で販売した。地域の入所者の育てる楽しみから、やりがいにつながった。地元農家、JAからの指導で収穫量、品質がよい結果となった。	入所者の食材に活用したが、地域の食堂へ食材を提供できなかった。
2	地域住民に施設の食事、取り組みを知っていただく活動をする。	高齢者向け食事の紹介ができた。施設での地域の特産物の栽培の取り組みを地域住民に紹介できた。	初めての企画であったため、利用者との対話ができなかった。
3	伝統的郷土料理を継承をする。	「豆むすび」「押しずし」をアレンジした定食を地域の食堂と協同企画し提供した。	利用者数が伸びなかった。提供方法の検討が必要である。

10. ビジョンの具現化に向けて来年度から取り組みたいこと

2025年度の取り組み	・地域の住民と「食」とおして交流を行う。 ・地域の特産物「佐伯おお長ナス」の栽培、地元食堂等へのレシピ、食材の提供 ・地域のフェスタで紹介、小学校での地元食材を使用した料理教室等学校と協力して食育の推進を行う。 ・地域の高齢者とグランドゴルフ大会を企画し、郷土料理を囲みながら対話し交流 ・これらの取り組みには準備段階から入所者が関わっていく
中長期的取り組み	・現在行っている地域での取り組みを継続して実践していく。

11. プロジェクト（自施設の取り組み・プロジェクト会議）を通して、他の施設に伝えたいこと

プロジェクト委員	職員だけでなく、入所者が地域と関わっていくことが必要である。
施設長	環境上の理由や経済的理由による措置入所の養護老人ホーム入所者は、地域との関わりが希薄となっているが、当施設の強みである「食」を通して地域と関わりを持つことで、入所者は生きがいを見つけ、職員は地域にとっての施設の役割と仕事のやりがいを得ることができる。

Ⅳ. 令和6年度(2024)総括

1. プロジェクトについて(主旨)

本プロジェクトは、社会福祉法人が運営する高齢者施設・事業所が、生活相談員が中心となり地域の福祉ニーズに目を向けるべく、生活相談員スキルアップ研修を開催し、その修了者の属する施設・事業所を中心に「地域福祉拠点設立推進プロジェクト」として、平成29年度(2017)から始めました。

これまで、16の会員施設が本プロジェクト会議を通して、社会福祉法人が運営する高齢者施設として、また地域共生社会の一翼を担う社会資源として、改めて地域の福祉課題に取り組んでまいりました。コロナ禍で思うように取り組めない時期もありましたが、新型コロナが5類となり、with コロナの視点での取り組みが求められる中、各々の施設で知恵を出し合い、創意工夫を重ねました。「地域福祉拠点設立推進プロジェクト」は、これらの取り組みを後押しすると同時に、社会福祉法人が運営する高齢者施設・事業所として、地域の社会資源としての存在価値を見出し、地域からさらに必要とされる存在であり続けるための取り組みです。

2. 令和6年度(2024)プロジェクトからの学び

本年度のプロジェクトでは、6つの施設が参加しました。昨年度からの継続施設の3施設は、社会福祉法人の公益的活動として法人全体で組織体を構成した取り組み、コロナ禍で施設と地域の関係が希薄になっていた状況からの再生、コロナ禍前に地域の社会資源として取り組んでいた認知症予防に関する取り組みの見直しに着手し、それらの取り組みによる成果を広島県老人福祉施設等研究発表会で報告しました。新規参加の3施設は、地域の多世代と関係性を再構築する取り組み、軽費老人ホームの機能を活かした地域共生の取り組み、食を通して地域と繋がり支え合う取り組みを各施設でプロジェクト体制を持ち推進しました。年4回のプロジェクト会議では、各委員が取り組みを報告し、相互に気づきを共有しながら自らの取り組みを推進できるよう後押ししました。

各施設の歴史や規模、事業種別、これまでの地域における役割や地域との関係性、地域のニーズなどに基づき、それぞれ特色のある取り組みが進められました。本年度のプロジェクトから地域福祉拠点としてのあり方として感じたことを列記いたします。

- ▶ 法人又は施設及び事業所として、社会福祉法人として、地域福祉拠点としての働きを大切に考え取り組む姿勢がある。
- ▶ 地域福祉拠点としての取り組みは、法人又は施設全体で共有され、職員一人一人の理解と協力が得られる状況下にある。そして、特定の職員のみで推進するのではなく、組織体として進められている。
- ▶ 各々の取り組みは、地域の福祉課題に応えたり、地域の興味や関心と一致していると同時に、参加する(した)職員のやりがいや新たな刺激を受ける機会になっている。
- ▶ 関係する機関や団体、ネットワークを巻き込んだ取り組みとなっている。
- ▶ 既存の組織体やネットワーク、社会関係が活用され、育まれる取り組みとなっている。
- ▶ 施設・事業所を知ってもらうだけでなく、地域の課題をくみ取りながら関わることができている。また、その課題に対して可能な範囲で共に解決に取り組む姿勢がある。

地域福祉拠点としての取り組みは、当然のことながら、理事長や施設長等の経営者の方針が組織に大きく影響を与えます。そして、その方針や考え方が組織として共有できているかどうか也非常に重要で、経営者と従業者・従業者同士のコミュニケーション、会議体の形成、コミュニケーションツールの活用等は取り組みの進捗や成果に直結すると改めて感じました。

また、この取り組みは、地域からの新しい風を呼び込む機会にもなります。地域の方との繋がりによって、改めて従業者自身が自らの施設等に対する魅力や存在価値を感じる機会にもなり、やりがいや働きがいにも繋がっていたようにも感じました。

本プロジェクトによる取り組みは、社会福祉法人として当然果たすべき使命ですが、昨今の人材難や経営難などの状況からすると、なかなか積極的な取り組みとはならないかもしれません。しかし、改めて従業者が地域住民と共に自らの施設等の存在価値や魅力に気づくことが、その施設等の応援団を増やしていくことにも繋がり、人材確保や経営状態にも好影響をもたらすかもしれません。本年度の事例集がその一助になれば幸いです。

3. おわりに

本プロジェクトは、社会福祉法人が運営する高齢者施設・事業所として、地域の社会資源としての存在価値を見出し、地域からさらに必要とされる存在であり続けるための取り組みです。手引き作りから本年で8年が経過しました。これまでの取り組みは、この目的を達成できているでしょうか。これまで参加された施設等がその後、地域福祉拠点としてどのように継続または進化できているでしょうか。この8年間の取り組みは、自治体や関係団体や住民等にどの程度認知していただいているでしょうか。そもそも、会員施設にプロジェクトの意義や取り組みが伝わっているのでしょうか。この間、重層的支援体制整備事業の推進、地域支援事業の改正など、地域の福祉を取り巻く環境は目まぐるしく変化しています。次年度に向けて、改めて、プロジェクトの主旨に立ち戻り、現状把握と課題整理をしながら、本プロジェクトをより良い取り組みに繋げていく必要があるのではないかと考えています。

各会員施設におかれましては、経営状況の悪化、人材不足、感染症など、さまざまな経営リスクに直面されていることと存じますが、引き続き、本プロジェクトに関心を持っていただくと同時に、ご理解とご協力とご支援をお願いいたします。

令和7（2025）年7月
地域福祉拠点設立推進プロジェクト
委員長 小野 誠之



V . 關係資料

3-3

途切れた地域との関係を再築する

プロジェクト RE の取り組み

return

review

reborn

広島県 府中市

ようごろうじん ほーむ ふちゅうせいわりょう
養護老人ホーム・府中静和寮

生活相談員・ふじわらまさかず 藤原正和

FAX 0847-41-8620

今回の発表の施設 またはサービスの 概要

広島県東部にある府中市にある法人で創立 85 年になる。高齢者福祉部門では養護老人ホーム・特別養護老人ホーム・地域密着特別養護老人ホーム・居宅介護支援事業所などある。

<取り組み課題>

府中市での高齢化が進み施設所在地の土生町でも高齢化率が 40%になっている。コロナ禍の影響もあったが少子高齢化が進み、地域の力が低下している。高齢化に伴いハイリスク高齢者も増えたが支援を行う人も少ない。施設もコロナ禍以前は地域との関りをもち行事など行っていたが、業務の負担増などあり地域との関りが減少している。そのため地域の高齢者からも敷居が高い様に感じられ来寮されるかたも少なく閉鎖的になっている。以前は地域と施設を結ぶ事業として「夢ふろしきの会」を行っていたが、それも現在中止をしており、より関係の希薄がある

<具体的な取り組み>

地域拠点プロジェクトへ参加し助言をもらいながら、事業所内でプロジェクトを進める
地域の現状を知る為に民生委員より話を伺う
地域の現状を把握しながら施設が出来ることを検討し、以前行っていた「夢ふろしきの会」のリニューアルを行うこととする
ただ同じことをおこなうのではなく、反省点を踏まえつつ継続して行えるような
「会」をつくる。

<活動の成果と評価>

新しく認知症予防教室「サクランボの会」を発足した。
参加者が想定より少なく第 1 回開催時には 10 名でハイリスク高齢者の参加も少なかった。
認知症予防の為脳トレや体力向上トレーニングを実施
参加者は参加後前向きな発言もあった
施設職員からは在宅の元気な高齢者をふれあうことで刺激を受けた様子

<今後の課題>

参加人数を増やすため他機関などと連携を行う
ハイリスク高齢者に対するアプローチを行う
現状参加者に対して飽きのこないプランを考える
地域に対して 会の 認知を行っていき、地域との関係性を増す必要がある

途切れた地域との関係を再築する

～プロジェクト：RE の 取り組み～

養護老人ホーム 府中静和寮

施設紹介 ①

静和会について

主な4事業：高齢者福祉・障害者福祉・母子生活支援・保育所事業

詳しくはホームページで



前身組織の創設年
1939年



施設数
36箇所



職員総数
約530人



従業員の平均年齢
50.0歳



平均勤続年数
9.2年

2025/6/3

地域の特徴

- 府中市の人口 35、585人
- 高齢化率 38%

(令和6年4月1日現在)



「夢ふろしきの会」って何？



実施内容など



2025/6/3



2025/6/3

活動 風景



RE スタート

- ターゲットを絞り
予防効果 と 実態把握
- 自発的な活動を促す
- 養護の入所者さんの参加



ターゲットを絞る

地域のハイリスク高齢者の参加

養護施設とのセッション



2025/6/3

参加者が自発的な取り組み

- 参加者の自発性
- 予防運動
- 参加者目線の活動
- 楽しく実態把握



2025/6/3

第1回 開催について

参加者

地域の高齢者 5名

(内高リスク高齢者1名)

養護入所者 6名

計11名



2025/6/3

参加職員

施設職員 4名

在宅職員 3名



専門職種 介護福祉士 社会福祉士 (主任) 介護支援専門員
管理栄養士 理学療法士 ファイナンシャルプランナー 等

2025/6/3

プログラム

認知症予防の為に

- 昔話（昭和の生活史）
- 体力測定・トレーニング



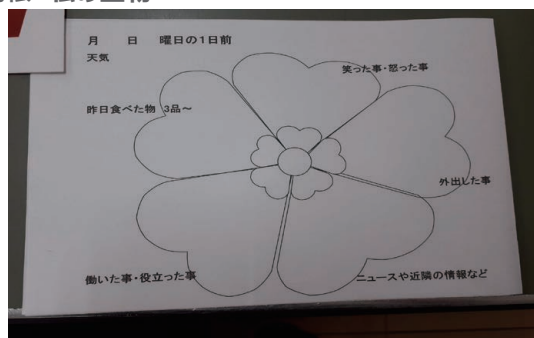
2025/6/3

活動風景



2025/6/3

脳活日記帳 私の宝物



2025/6/3

活動風景 2



2025/6/3

参加者の声

施設へ初めてきた。同世代と昔話をして楽しかった。
友達が出来たよう感じがする
施設へ入って中の人としか会話がなかったが交流が
出来て新鮮な気持ちになった
体力が落ちているように感じるので頑張って運動をしたい
等々



2025/6/3

今後の取り組み

緩い目標設定

期限なく冊子の作成
景色の良い場所でのノルディックウォーキング
など



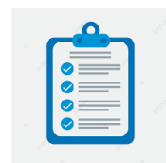
2025/6/3

評価

参加者について
(ターゲット)

満足度について

地域との関係性について



2025/6/3

【本発表に関する問い合わせ先】

施設：事業所名：養護老人ホーム府中静和寮

担当者名：藤原 正和

電話：0847-41-6222

メール：kyotaku.seiwa3@gmail.com

2025/6/3

3-4

地域公益活動の取り組み

地域力の向上

協働

法人職員一丸

地域・行政・社会福祉法人が協働し地域力を高める

広島県 尾道市

くれあーるらくせいえん
クレアール楽生苑

介護主任

かいはら たかゆき
貝原 貴之

介護福祉士 山内康平

E-mail Address : info@rakusei.or.jp

Fax 番号 : 0845-27-2927

今回の発表の施設
またはサービスの
概要 10p

瀬戸内海に浮かぶ生口島に平成 27 年 5 月に開設した。ユニット型で定員 40 名の施設です。日々の暮らしの中で支援が必要な方が少人数グループで生活、他の入居者や家族と交流を行うことで「家庭的な雰囲気」を感じることが出来ます

※以下 9p

<取り組み課題>

- ・瀬戸内海に浮かぶ生口島・高根島の 2 つからなる瀬戸田町は令和 6 年 4 月時点で人口 7000 人弱・高齢化率は 46% となっており人口減少・高齢化の上昇という地域課題が上がっています。
- ・令和 2 年 9 月に高根島にある自治会より高齢者の買い物支援を協力してほしいと言う依頼があり自治会・法人・社協の 3 つの組織で協働し令和 2 年 10 月より高根地区の買い物支援を開始しました。

<具体的な取り組み>

- ・平成 27 年度社会福祉法の改正を機に自法人で地域公益活動推進委員会を立ち上げました。
 - ・地域公益活動では、拠点づくり・買い物支援・こども食堂等様々な活動に取り組んでいます。
- 買い物支援の役割について
- ・自法人は車両の提供および送迎。
 - ・自治会は地域の高齢者から対象者の選定および買い物当日の見守り。
 - ・社協は保険や補助金等の情報提供。
- 3 つの組織が協働し取り組みを行っている。

<活動の成果と評価>

- ・月 1 回の会議（第 2 木曜日）と月 1 回の開催（第 2 日曜日）の活動を継続中です。
 - ・現在行っている買い物支援のシステムやルールは確立しているので、今後も継続して行います。
- 評価について
- ・評価項目は「利用者の生活の質」として、アンケート記入をしていただき、取り組みについて評価します。

<今後の課題>

- ・年度末に新たな買い物支援対象者の選定を行い、制度の狭間で生活に困っている方を確実に見つけ支援を行う。
- ・現在買い物支援を利用している対象者へ他の生活課題について聞き取りを行ったところ、ゴミ出し（粗大ゴミ）の課題が上がっている。
- ・ゴミ捨て支援を開始する為、3 つの組織間でテーブル会議を開催し、役割やルールを決める。
- ・島内の他の地区にも同じような課題・生活困難があると思われるが、地域から声が上がっていない現状について、支援方法や介入方法を検討する必要がある。

地域公益活動の取り組み

～地域・行政・社会福祉法人が協働し地域力を高める～

特別養護老人ホームクレール楽生苑

広島県 尾道市 瀬戸田町（生口島）



生口島は
広島県尾道市と愛媛県今治市を結ぶしま
なみ海道のほぼ中央に位置する人口約
7000人弱の小さな島で、生口島と高根島
の2つの島で形成されています。
観光地として老若男女沢山の方が訪れ
サイクリング等で人気の観光スポットに
なっています。



高齢化率 **46%**
人口**7000**人弱(令和6年度4月時点)

人口減少・高齢化の上昇
という地域課題が上がっています。



広島県 尾道市 瀬戸田町（生口島）



生口島は
広島県尾道市と愛媛県今治市を結ぶしま
なみ海道のほぼ中央に位置する人口約
7000人弱の小さな島で、生口島と高根島
の2つの島で形成されています。
観光地として老若男女沢山の方が訪れ
サイクリング等で人気の観光スポットに
なっています。



高齢化率 **46%**
人口**7000**人弱(令和6年度4月時点)

人口減少・高齢化の上昇
という地域課題が上がっています。



社会福祉法人 新生福祉会

理念

みんなが受け入れられる居場所づくり

共に歩む

個々の多様性を理解しお互いに支え合いながら共に成長していくことを大切にします。

個人の尊重

個々の独自性を尊重し多様なニーズや価値観を理解し受け入れます。

機会の平等

差別や偏見を排除し、公平・平等な支援やサービスを提供します。

対話の理解

コミュニケーションを通じて、異なる意見や背景を理解し合い共感し合うことでよりよい関係を築きます。

地域との連携

地域の多様性を尊重し、地域資源やネットワークを活用しながら地域との繋がりを大切にします。

新生福祉会での仕事を通じて差別や偏見のない、多様性を認め
みんなが成長できる居場所づくりができればと考えています！



社会福祉法人 新生福祉会

理念

みんなが受け入れられる居場所づくり

◎法人のコンセプト

「支援が必要な地域住民に対してシームレスな支援を行う」

高齢者福祉分野⇒予防から看取り 障害分野⇒未就学から就労まで

◎利用者各ステージに合ったサービス提供が出来る法人であることを目指す。

◎公益活動を推進していくことは、既存のサービスでは支援が行き届かないサービスの狭間の方の支援に必要な新たな地域資源を作ること。

地域公益活動が始まった経緯について

平成27年度社会福祉法の改正を機に、自法人で地域公益活動推進委員会を立ち上げました。



地域公益活動では、拠点づくり・買い物支援・こども食堂等様々な活動に取り組んでいます。



組織図

社会福祉法人新生福祉会

地域公益活動推進委員会

特別養護老人ホーム楽生苑

地域密着型特別養護老人ホーム楽生苑いこいの里

デイサービスセンター楽生苑

ケアハウス楽生苑

楽生苑短期入所生活介護

楽生苑居宅介護支援事業所

楽生苑訪問介護事業所

認知症対応型通所楽生苑ひなたの家

福祉用具貸与事業所リンク

特別養護老人ホームクリアール楽生苑

養護老人ホーム 寿楽園

小規模多機能型ホーム楽生苑みのりの里

就労継続支援B型ボナブル楽生苑

生口島子育て支援センターはっぴい

児童発達支援・放課後等デイサービス事業所ひだまり

日中一時支援事業所ひだまり

法人内の各事業所から委員を選出し委員会を組織している

TUNAG

社会福祉法人新生福祉会

特別養護老人ホーム

楽生苑

福祉用具貸与事業所

就労継続支援B型



楽生苑

認知症対応型通所

楽生苑みのりの里

支援事業所ひだまり

立ち上げの際に法人本部にて全職員に対して
公益活動についての研修会を行う。



利用対象者

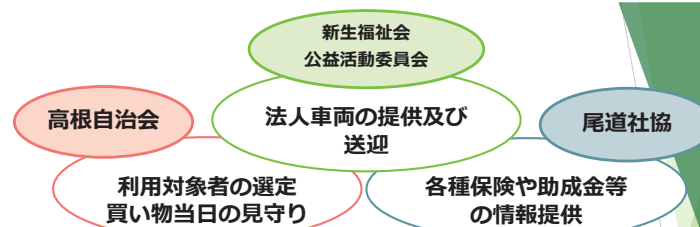
- ①75歳以上の人 ②一人暮らし ③車を使えない人
- ④スーパーの中は自分で買い物できる人

▶第2日曜日

▶時間 9時30分～11時30分の間



買い物支援



3つの組織にそれぞれ**役割**を作り、**協働**して活動していく。



高根自治会

協力依頼

新生福祉会

協力依頼

高根自治会

高根自治会

~~協力依頼~~

新生福祉会

協力依頼

高根自治会

実際の買い物支援の様子



実際の買い物支援の様子



実際の買い物支援の様子



実際の買い物支援の様子



実際の買い物支援の様子



買い物支援を行って難しかった事

- ①課題解決に向けての体勢作り。
- ②同じ課題のある地域に活動が広まらない。
- ③地域住民が主体的・自発的に課題解決に取り組めるように働きかける。



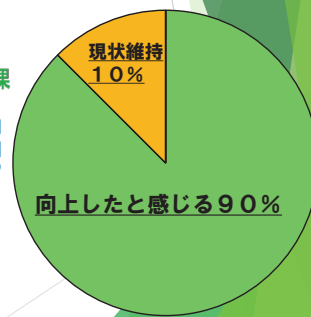
評価について

月1回の会議にて自治会の方へアンケートの説明をし現在買い物支援を行っている対象者の方にアンケートを実施しました。
《買い物支援を行う前の生活と買い物支援を行ってどのように生活が変わったか》
即ち、QOLの向上について確認しました。



買い物支援アンケート結果

QOLの向上
しましたか？



買い物支援を行う前と行った後で生活がどのように変わったか

一人では中々出かけられないのに送り迎えつきで大変助かっています。

買い物することで普段会えない方との交流ができ世間の情報を得ることができ嬉しいです。

これからも皆様と楽しく有意義な時間を送りたいです。

独り生活では味わえなかった繋がり大切さを年齢には関係なく強く思うことができました。



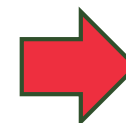
買い物支援を行う前と行った後で生活がどのように変わったか

【買い物支援のまとめ】

- ①職員の業務としての意識づけ。
- ②高根自治会のボランティア方も高齢であり担い手の課題。
- ③活動を通じ買い物支援の必要性を強く感じました。トライ&エラーを繰り返し継続していく。



新たな課題について



まとめ

◎自法人の全職員が公益活動を再度理解し、相談を受ける担当につなぐ・地域住民にフィードバックを行う事ができるように伝え続け、各取り組みや活動内容の周知も定期的に行っていきたいと思いました。

◎高根地区だけでなく他の地区にも買い物やゴミ出しなどの課題や生活困難があると思わますが地域から声が上がっていないのが現状です。
この現状についてこれからの公益活動を通して支援方法や介入方法などを検討していく必要性がありました。



ご清聴ありがとうございました

【本発表に関する問い合わせ先】

施設・事業所名：特別養護老人ホームクレール楽生苑

担当者名：貝原 貴之

電話：0845 - 27 - 1600

メール：info@rakusei.co.jp

3-5

地域との繋がり復活と深めていくために

～施設の中から地域へ～

地域密着

地域交流

チーム作り

三次市

とくべつようごろうじん
特別養護老人ホームみよしの

介護主任

まずくに 升國 しゅうへい 周平

E-mail miyomiyomiyoshino@gmail.com

今回の発表の施設
またはサービスの
概要 10p

社会福祉法人水明会は昭和 26 年に開設、74 年を迎える。平成 19 年 6 月に開設した、地域密着型特別養護老人ホームみよしのは、定員 29 名、ショートステイ定員 18 名。「尊厳の保持」を基本理念としている。

<取り組み課題>

- ・新型コロナウイルス感染症が発生して以来、地域との繋がりは希薄になってしまい、同時に職員の地域へ目を向ける機会も失っていた。
- ・薄れている地域共生の意識を取り戻すために、施設や地域の現状に合った無理のない地域貢献の取り組みを、現場職員の目線で模索する必要があった。

<具体的な取り組み>

- ・施設内へ地域福祉活動推進委員会を立ち上げる。介護職員 4 名と看護師 1 名で構成。月 1 回、地域貢献への話し合いを実施。自分たちができる実践内容を議論した。
- ・地域住民と一緒に花火を見る会の企画。入所者と住民と一緒に楽しむ企画だった。チラシを作成し、地域へポスティングしたが、当日雨天中止となる。
- ・運営推進会議を施設内で再開。
家族代表、市職員、社協職員、施設長、地域代表との話をし、地域の実情把握や施設の地域貢献への思いの共有を図る。
- ・夕涼みの開催。
地域自治会、子供会、施設共同での企画。盆踊り大会に代わる地域行事として交流を図る。同法人施設の各部署の上長に応援依頼し、協力を得て実施。
- ・認知症カフェへの介護職員の講師派遣。
毎月 1 回、民生委員主催の認知症カフェにて、体操やレク等を実施。
- ・小学生の施設見学受け入れ。
地域散策の授業で訪れた小学 2 年生の児童 73 名を、事務員の声掛けから急遽、施設見学に発展した。

<活動の成果と評価>

- ・地域の方と直接話をする機会が出来、その中から、困り事や次の取り組みへのヒントが得られるようになった。
- ・地域の方と職員や入所者の繋がりを見ることが出来、身近に施設があることを感じてもらった。
- ・施設内に仲間を作る事で、アイデアや取り組みやすさが生まれた。楽しんで取り組むことで、一部の職員にだが、少しずつ地域へ目を向けることが浸透してきた。
- ・各部署の上長を巻き込むことで、地域への取り組み姿勢を法人内の各事業所も知らせることが出来た。
- ・認知症カフェへ参加した職員からは、施設へ戻っても経験したことを通じて、チャレンジしていきたいと、意欲の向上が見られた。

<今後の課題>

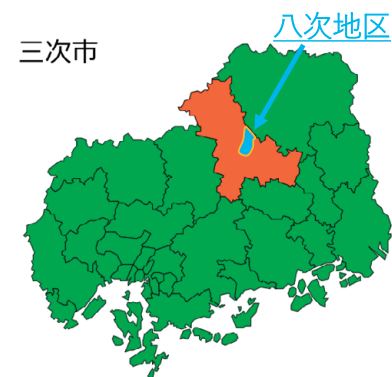
- ・運営推進会議や民生委員、自治会との繋がりを継続し、地域の小さな課題からでよいので共有していきたい。そこから「地域の課題」と「施設に出来る事」をコーディネートし取り組みに発展させていきたい。
- ・取り組みの中には入所者の存在を意識した企画を続ける。
- ・一人一人が変化し、「やってみる」を継続する。
- ・小学校で取り組まれているコミュニティースクールへ協力していきたい。

地域との繋がりの復活と深めていくために
～施設の中から地域へ～



社会福祉法人 水明会
特別養護老人ホーム みよしの
介護主任 升 國 周 平

【三次市 八次地区】



引用：三次市HPより

【三次市 八次地区】



引用：八次連合自治会HPより

施設の紹介

水明会は、昭和26年（1951年）スタート！
今年74年を迎えています。



養護老人ホーム水明園 （定員50名）
特別養護老人ホーム水明園 （定員30名） 短期（14名）
デイサービスセンター水明園 （定員30名）
水明園居宅介護支援事業所

特別養護老人ホームみよしの（定員29名）
みよしの短期入所（定員18名）



取り組みの背景

2023年度から、広島県老人福祉施設連盟の地域福祉拠点設立推進プロジェクトへ参加する事となった。

- 「社会資源としての特養」だけではいけないの？
- 地域貢献？地域の役に立つ事って？何をすればいいんだろう？



これまで行っていた地域との繋がり

- 施設での盆踊り大会
- 地域の盆踊り大会へ参加
- 地域の一斉清掃クリーン作戦、溝掃除活動参加
- 中学生の職場体験
- 高校生ボランティア活動の受け入れ
- 保育所運動会へ入所者と応援見学
- 自治会女性部ボランティア受け入れ
- 元気ハツラツ教室への参加
- 運営推進会議

これまで行っていた地域との繋がり

- 施設での盆踊り大会
- 地域の盆踊り大会へ参加
- 地域の一斉清掃クリーン作戦、溝掃除活動参加
- 中学生の職場体験
- 高校生ボランティア活動の受け入れ
- 保育所運動会へ入所者と応援見学
- 自治会女性部ボランティア受け入れ
- 元気ハツラツ教室への参加
- 運営推進

コロナもあり疎遠に・・・

- 職員や法人全体にも地域との繋がりへの意識が少しずつ薄れているのではないかな。
- 地域への活動が活発だったころを知っている職員も少ない。
- 施設の業務がまずは大切。
- 外部へ出ると、業務が大変になってしまう。

何となくマイナスのイメージ

地域福祉活動推進委員会の立ち上げ

仲間を増やすこと

なかなか難しいなあ



自分たちには、
何ができるかね

取り組みに挑戦

- 花火を楽しもう会の企画
- 雨で打ち上げ花火が中止



「地域に必要な事」を見つける

運営推進会議の再開と参加

自治会の加入者が減っている。田や畑が減りアパートや新築一戸建てが増えて住民も増えているが、自治会には入会されていない方が多い現状。

施設周辺の地区では、60世帯 ➡ 46世帯 (麻原地区自治会長より聞き取り)

共通の思い

地域みんなで、顔の見える関係を大切にしていきたい

地域の「今」に合った取り組み



自治会のメンバーも少しずつ年齢が高くなってきている。
暑くて準備も大変、以前のように出来そうにない。



「盆踊りは出来ないが、形を変えて何かできれば・・・！」



地域みんなで夕涼み会ならできるんじゃないか！？

麻原地区夕涼み会



フランクフルト
焼き鳥、焼きいか
ジュース
ピザ窯焼きピザ

自治会
鮎のつかみ取り
鮎の塩焼き



水明会
かき氷
手作りうちわ作り体験
介護食試食

久しぶりの出会い

子供会ヨーヨー釣り



地域の方との再会



久しぶりの鮎

地域の方の声

たくさん来てくれ
て良かったのう

まあ～久しぶりじゃね～
あんたあ元気にしとったん～？

ばあちゃん！分かる～？
オレよ！

来年もまた
出来たらええ
のう

楽しかったよ～

参加職員の声（自由記述）

- ・利用者も職員も、久しぶりに地域の方との交流に繋がった。
- ・施設前の公園を上手く活用し地域交流ができた。
- ・子供達が多く参加してくれ盛況だった。
- ・水明会・部署間での繋がりや相互協力の姿勢を感じる事が出来た。

施設から認知症カフェへ

施設職員は地域へ出向く機会がほとんどない

自分たちの学んできた知識や経験は地域の社会資源になる



自分たちも地域の認知症カフェの講師ができるんじゃないか！？



認知症カフェの様子

参加者人数は、20～23名

70～80歳代の女性が多い



内容
 ・コグニサイズ
 ・手話うた
 ・反射神経ゲーム
 ・ジェスチャーゲーム
 ・介護川柳ボエム名言
 など



突然の訪問



成果

- ・地域との繋がり再開、声を聞く機会が出来るようになった
- ・身近に水明会、みよしのの事があると知ってもらえた
- ・法人内の地域への意識と横の繋がり意識
- ・職員自身のやりがい・スキルアップにつながった
- ・地域で働いているという自覚の芽生え

今後の課題

- 地域との交流から、地域課題発見・解決へ、求められる施設へ発展させること
- 地域の中で働いている自覚の維持
- まずはやってみるを実践し、継続していくこと
- 施設にいても地域と繋がっていると感じ続けてもらうこと

大切にしていきたい事



ご清聴ありがとうございました

【本発表に関する問い合わせ先】

施設・事業所名: 特別養護老人ホームみよしの

担当者名: 升國 周平

電話: 0824-65-0843

メール: miyomiyomiyoshino@gmail.com

広島県老人福祉施設連盟

令和6年度地域福祉拠点設立推進プロジェクト会議 委員名簿

	所属ブロック	事業種別	事業所名	職 名	氏 名	備考
役員等	福山	-	府中静和寮	統括施設長	伊田 易史	担当副会長
	東広島	-	大崎美浜荘	施 設 長	藤原 貞弘	担 当 理 事
	廿日市・可部	-	阿品清鈴	施 設 長	小野 誠之	委 員 長
	三次	-	すいれん	施 設 長	滝本 雄司	副 委 員 長
担当施設	福山	養護	府中静和寮	主任相談員	藤原 正和	R 6 発表
	尾道	特養	クレアール楽生苑	介 護 主 任	貝原 貴之	
			楽生苑	介護福祉士	山内 康平	
	三次	特養	みよしの	介 護 主 任	升國 周平	R 7 発表
	東広島	軽費	軽費老人ホーム コーポまとば	生活相談員	小椋 裕	
	呉・海田	特養	温養院	生活相談員	冠崎 幸生	
	廿日市・可部	養護	さいきせせらぎ園	生活相談員	神垣 輝	
				管理栄養士	椿 奈々実	